

アンスコムによる実践的真理に関する考察について

実践的真理及び行為の真に関する、意味の真理条件的理解

山口 誠(九州大学)

本発表の目的は、現代英国の哲学者アンスコム(Anscombe, G. E. M.)が、論文「アリストテレスに於ける思考と行為 —「実践的真理」とは何か?—」(「Thought and Action in Aristotle: What is 'Practical Truth'?», 1965, 以下、アンスコムの著書に関しては略記号を使用)の中で考察した「実践的真理」という概念について明らかにすることである。アンスコムの哲学は、一般に、近代哲学の呪縛から解き放つものとして理解されるべきものだが(I, § 32)、実践的真理も、それが「正しい欲求との一致のことである」(TAA, p. 77)と述べている点に於いて例外ではない。というのも、アンスコムは、実践的真理に関する考察を通して、欲求の対象たる、善きもの・価値的なものに関しても、正・不正を、即ち、真偽を問うことができるのだと考えており、こうした考え故に、広く「べし」と表わされる道徳的問題が「である」という事実命題から導出されてはならないと考えたヒューム(Hume, D.)とは異なるものだからである(MMP, pp. 28 – 33)。

しかし、であるからこそ、では、如何にして、「べし」は「である」から導出されることになるのか、即ち、如何にして、欲求は思考によって規定されることになるのかということが、アンスコムに於いても問題となるとも考えられる。というのも、アンスコムは、思考によって規定された「正しい欲求」と理解される実践的真理の成立の必要条件として、その正しい欲求の対象たる行為の目的を実現する為の手段にも関わる場所の行為も真とならなければならないと考え(TAA, p. 77)、尚且つ、その反対の実践的虚偽の必要条件として「行為の偽」を考えており、この点に問題があるからである。何故ならば、実践的虚偽に於いては、不正な目的を達成する為に為される手段が真となることもあり得るからである。

本発表では、実践的真理を巡る、以上のような問題を、特に、実践的真理と行為の真との関係の問題を考察することにしたい。

その為、此処で、「である」と表される事実を考察するに関して、我々は、前期ウィットゲンシュタイン(Wittgenstein, L.)によって示された、意味の真理条件説的な理解を念頭に置く(cf. Wittgenstein(1918), 4)。要するに、アンスコムは、此処での事実を、「である」と表わされる命題が真となる可能性に、即ち、真理条件であると理解していた(cf. Teichmann(2008), pp. 194 – 198, IWT, chap. 3 – 4)。そして、偽なる判断が、判断そのものを何も行っていないということを含意しているのではないということ(cf. Plato, 189a)と同じく、真なる行為に於いては無論のこと、偽なる行為に於いても、何らか、事実、行為が為されているのであり、行為の真偽は、言わば、そのような真理操作の二側面の表裏を表すものに他ならないのである。

こうした「である」と表わされる事実に関する真理条件的な理解は、徳ある人及び悪徳な人によって為される行為と、「無抑制な人(akratēs)」によって為される行為との相異を明らかにする。

即ち、アンスコムは、アリストテレスの考えに則って、実践的真理或いは実践的虚偽、及び、その必要条件たる行為の真乃至偽の成立に際して、行為者の道徳的な性格を、即ち、行為者が徳ある人なのか否かを重視していた(TAA, p. 70)。そして、行為者の為す「べき」ことは、徳ある人によって、そのような「である」たる状況把握の下に、言わば、状況反動的に為されることになる。そして、この時に、「べし」は、このような状況把握に基づいて、

「何故?」という問いに対する「何故なら」という答え、それも最終的な答えによって、「である」から導出されることになる(cf. 菅(2017), pp. 98 – 102)。とすれば、詰るところ、徳ある人乃至悪徳な人によって為される行為は、正・不正の相異はあるにせよ、「べし」としての何らかの目的が導出されるのに対して、無抑制な人によって為される行為はそれが導出されないのである。

従って、以上の点で、そのような性格とは無関係に成立する、技術知や無抑制な人によって為される行為に於いても成立する、上述のような、目的に対する手段としての行為の真は成立し得ない。寧ろ、行為の真とは、先ず、その時に、この場合の「である」と表わされる、徳ある人なのか否かという行為者の人柄によって、正しく状況把握されるのか否かによって条件付けられ、それ故に、行為の真は実践的真理の必要条件たり得、行為の偽は実践的虚偽の必要条件たり得ることになる理由といえ、実践的真理乃至虚偽が、そのような状況把握に基づいた、「何故?」という問いに対する「何故なら」という最終的な答えによって導出されるものでもあるからなのである。

実践的真理に関する、以上のような問題及びそれに関する理解を踏まえて、本発表は次のように行われる予定である。

第一節 倫理的な性格による「である」から「べし」への導出

「である」から「べし」は、徳ある人による正しい状況把握による、状況反動的な、正しい欲求の対象たる目的を実現する徳ある行為によって実現される。

第二節 徳ある人によって真理条件的に把握される事実

徳ある人によって状況把握される事実は、真偽の一步手前の可能性として、真理条件的に把握されるべきもので、これによって、徳ある人及び悪徳な人と、無抑制な人とが区別される。

第三節 「何故?」という問い: 状況把握から正しい欲求の導出

実践的真理・虚偽、即ち、行為を動機付ける欲求の正・不正は、行為者による状況把握の正・不正に基づく、「何故?」という問いに対する「何故なら」という答えによって最終的に示される二側面である。

第四節 実践的真理とは行為の真であるということ

それ故に、行為の真偽は、技術知や無抑制な人によって為される行為にも当て嵌まる、目的に対する手段の真偽に留まらず、寧ろ、実践的真理乃至虚偽の二側面に対応し、端的に、実践的真理は行為の真を、実践的虚偽は行為の偽を導出するものとなる。

引用文献(cf. Teichmann(2008), pp. 231 – 241)

Anscombe, G. E. M.(1957), *Intention*, 2nd ed. (I と略記)

—— (1958), 'Modern Moral Philosophy' (MMP と略記)

—— (1959), *An Introduction to Wittgenstein's Tractatus* (IWT と略記)

—— (1965), 'Thought and Action in Aristotle: What is 'Practical Truth'? (TAA と略記)

菅豊彦 (2016), 『アリストテレス『ニコマコス倫理学』を読む —幸福とは何か—』, 勁草書房

Plato, *Theaetetus*

Teichmann, R.(2008), *The Philosophy of Elizabeth Anscombe*, Oxford University Press: Oxford

Wittgenstein, L.(1918), *Tractatus Logico-Philosophicus*